

2020. 10. 4 (日) マタイ23:1~4

**23:1** そのとき、イエスは群衆と弟子たちに語られた。

**23:2** 「律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。

**23:3** ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。

**23:4** また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。

<説教>

パリサイ人や律法学者たちは「もうだれも、あえてイエスに質問しようとはしな」くなりました (22:46)

これによって、パリサイ人や律法学者たちがイエスを神の子キリストと認めず信じず拒絶する姿勢は決定的となりました。

そのようなイエス・キリストなく、悔い改めなく、神の御支配（神の国）に入ることなく突っ走るパリサイ人や律法学者たちのようではなく、イエス・キリストに神に立ち返るように、悔い改めるように、神の御支配に服するように「そのとき、イエスは群衆と弟子たちに語られた」(23:1)のです。

**23:2** 「律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。

**23:3** ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。

**23:4** また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。

「モーセの座に着いています」とは律法（聖書）の公式の、正式な教師としての務めを負っているということです。

ユダヤ人が神の民にふさわしく歩むように、民に聖書から神の御意思（みこころ）を教え導く務めを負っていたのが「律法学者たちやパリサイ人たち」でした。

それは確かに神から委ねられた、重んじるべき職務でした。

その意味で「ですから彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。」とイエスは言われました。

「彼ら」「律法学者たちやパリサイ人たち」をイエスはすでにこれまでも何度も厳しい言葉で非難なさって来たとし、またこの後も厳しく責められます。

しかしそんな“悪い教師”であっても彼らの口から言葉としては聖書に基づいた真理が語られ教えられるなら、その教えは教えとして重んじ、聞いて「すべて実行し、守りなさい」ということでしょう。

もちろん彼らの言う「長老たちの言い伝え」「自分たちの言い伝え」によって神のことばを無にしてしまうようなことなら実行してはならず守ってはいけないことはすでにイエスが言われたことでした（15章）。

神の律法の最重要点、一番重要なことが「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」ということでした。

この主なる神のみこころにかなう限り、律法学者たちやパリサイ人たちが聖書に基づいてから語り教えることは「すべて実行し、守」るべきでした。

「しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。」とイエスは続けて言われました。

「(言うだけで) 実行しない (行わない)」ことが「彼らの行い」だと言うのは面白い言い方、または大いに皮肉を込めた言い方のように思います。

彼らが「言うだけで実行しない」というのは、“口先だけで”言うことだけ言ってあとは“寝転んで怠けて何もしないでいる”ということではありません。

それどころではなく、彼らはありとあらゆる努力をして「彼らの行い」を、“律法の行い”を一所懸命に行っていたのです。

既に指摘されたように彼らは善行に施しに励み、祈りに断食に励んでいました(6章)。

またこのあとも彼らが必死に行っていた「彼らの行い」をイエスは明らかになさいます。

しかしやはりそんな「彼らの行い」の背後にある精神が神のみこころにかなっていなかった—要するに神なし、聖霊なしの不信仰だった—ということでしょう。

やはり彼らは自分たちの“律法の行い”によって、それを神の前に盾にとって、自分の正しさを言い立てて、永遠の命を要求していたのでした。

彼らが語り教えている律法の言葉、文字に示されている神のみこころとは違う、反することを行うことが「彼らの行い」でした。

それは人の目からは隠されていたかも知れませんが、神の目には明らかでした。

また神の預言者たち、またバプテスマのヨハネのような、そしてイエス・キリストのように聖霊に満たされていた人にも明らかでした。

後に使徒パウロも聖霊に示されて指摘しました。

「あなたが自らユダヤ人と称し、律法を頼みとし、神を誇り、みこころを知り、律法から教えられて、大切なことをわきまえているなら、また、律法のうちに具体的に示された知識と真理を持っているので、目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だ、と自負しているなら、どうして、他人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取るのですか。律法を誇りとするあなたは、律法に違反することで、神を侮っているのです。」(ローマ 2:17-23)

「彼らの行いをまねてはいけません」とは直訳的には、「彼らの行いを基準として、土台として行ってはいけません」ということです。

そんな「彼らの行い」についてイエスは言われます。

**23:4** また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。

長老たちの言い伝えや自分たちの言い伝えがイエスの目には神のことばを無にする自分勝手に無駄なものであり、それを「人々の肩」に「重くて負いきれない荷」として「載せる」ことが「彼らの行い（「行い」は「仕事」とも訳せます）」となっていました。

そしてそれだけでなく、彼らが聖書から神の律法から言葉や文字を持って来て教えていた教えまでもが一先に見たように言葉の上では正しく真理であったとしても、律法を守り行って自分の義を獲得せよ、永遠の命を得よ、そうでなければ呪われるというような「重くて負いきれない荷」となっていました。

彼らの“仕事”は「重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せる」こと、それで終わり、あとは知らんぷり、見て見ぬふり、ということでしょうか。

「それを動かすのに自分は指一本貸そうともし」ないということです。

自分たちでも「重くて負いきれない荷」を「束ねて人々の肩に載せ」ようとしているうえに「自分は指一本貸そうともし」ないでいるということでしょう。

または、自分たちの教えによって「重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せ」ることになったというのに、それを動かして重荷を下ろしてやるために「自分は指一本貸そうともし」ない、「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」(27:4)と言って何の助けもしないということでもあるでしょう。

そして、そんな彼らが「人々の肩に載」った「重くて負いきれない荷」を動かし下ろしてあげようと何事かを熱心に一所懸命にしたところで、それは人々にとっては全く（「指一本貸」すほどの）助けにならないということでもありましょう。

このように、「彼らの行い」は、「群衆と弟子たち」の「行い」の拠って立つ基準・土台には全くなり得ない。

「重くて負いきれない荷を束ねて」「肩に載せ」ている人々―「群衆と弟子たち」―から重荷を取り除き助けることは「律法学者たちやパリサイ人たち」には全くできない。

それゆえ、彼らがあなたがたに言うことは、それが聖書の言葉である限りはすべて行い守るべきだが、「彼らの行いをまねるな」、「彼らの行いに頼るな」、「彼らの行いをあなたがたの行いの基準にするな」

そう主イエスは言われたのです。

では「群衆と弟子たち」つまり私たちはだれの行いをまねる、つまりだれを自分たちの助けとし、頼りとし、行動・生活そして永遠のいのちの土台とするべきでしょうか。

そのことはもう既に主イエスが教えてくださっていました。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとの来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」(マタイ 11:28-30)と。

「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」と要約される神の律法（みことば）に真剣に向き合い学び、みことばを言葉と行いで実行しようとするなら到底実行できない愚かで惨めで罪深い自分の現実に驚き、絶望するほかありません。

そこで神の前にくずおれ謙遜になって、人間（とその教え）にではなく、ご自分のもとに立ち返るようにと主イエスは今日も私たちに語り、教え、招いておられるのです。